

希望を耕す

技術の編集

東京大学教授・建築学
松村秀一
Shuichi Matsumura

ベテラン建築技術者の集団

今から一八年前、仲間の方々とある任意団体を立ち上げた。「建築技術支援協会」（略称・サーツ、<http://www.psats.or.jp/>）という。翌一九九九年に、当時制度ができて間もない「特定非営利活動法人」（いわゆるNPO法人）の認可を受け、これまで一〇〇名ほどで活動を続けてきた。

この団体は、高度経済成長期からバブル経済期にかけての日本の建築を支えた技術者たちが、当時次々と定年を迎えるという事態を受け、現在のようにさまざまな建築技術がマニュアル化される以前に、自ら試行錯誤を繰り返す中で日本の建築技術を磨いてきた彼らの知識と経験を、次の世代に伝承するとともに、市民社会と建築技術者の世界を繋げる存在にしていこうという趣旨で設立された。だから、主要なメンバーは一八年前に六〇歳前後だった建築技術者たちである。意匠、構造、設備、施工管理、研究、行政の別や、野丁場、新丁場、町場の別を問わず、この主旨に賛同した個人が集った。最初の声かけを担当したことから、東工大の和田章先生と私が今日まで代表理事を務めている。

元々次世代への技術伝承を目論んでおり、初めの内はその方向での活動が色々と進んだのだが、建築技術の変化は思いのほか速く、一八年経った今では、彼らベテラン技術者の知識や経験の多くは歴史物になりつつある。

例えば、以前は、大手ゼネコンで長年施工管理を担当されたメンバーが、中堅ゼネコンの技術者たちに、高い品質を確保できる納まりや施工法を、その理由とともに指導する機会も少なくなかったのだが、今ではすっかりご無沙汰になっている。

曰く、
「屋根の防水一つとっても、アスファルト防水の上に、押さえコンクリートを打って、適度な間隔で目地を入れるなんていう私たちの時代のものとは、材料も全然変わっちゃっているし、『なんで目地なんか入れるんですか？』っていうような技術になっちゃってるんですよ。私たちの知識は直接には活かしようがないんですね、今の時代」

「でも、技術の背景にある原理は伝えられるんじゃないですか？」
と問うと、

「もちろん原理は大事だけど、個々の技術に

については、もうゼネコンの手を離れてサブコンやメーカーがすっかりしてきて、ゼネコンの現場担当者は原理なんか知らなくても、技術が完全にマニュアル化されているんですよ。自分たちの頃はサブコンも一代目だったりして、こちらが教え導くという感じだったけど、今やサブコンも三代目だったりして、彼ら自身の中に相当な技術蓄積があるんですよ。もうゼネコンが教え導くような時代じゃないんですね」とのこと。

編集者としての役割

建築技術の核心部分のある組織から別の組織への移動。このことは「建築生産」という学術分野でも、故古川修先生を初め、多くの方が以前から指摘されていた。前川國男さんの頃までは設計者がゼネコンやサブコンを指導し、しばらくすると技術の核心部分がゼネコンに移って彼らがサブコンを指導し、そうこうしている内に技術の核心はサブコンに移るといふ不可逆的な変化のことである。そして、建築技術支援協会のベテラン技術者の発言は、この不可逆的変化が来るころまで来たという現在の状況を表

しているのだろう。そして、その先には、技術の核心部分の海外への移動がある筈だ。技術という面で見ると時の国内空洞化を、将来の姿と見なすことにさほどの無理はない。事実、施工図の多くは既に海外で描かれている。

更に、現在適用が進みつつあるBIM等は、技術の核心の所在を大きく変化させる可能性がある。建築を構成する要素技術はデータ化され世界中を流通し得るし、その改善には組織の枠を超えた集合知の手法が使われ得る。要素技術の最適な組み合わせについても、要素技術の属性データがきちんと揃っていれば、性能面や生産面から様々な評価がたやすくできるようになるだろうし、その結果もまたデータとして蓄積され、広く適用できる形になるだろう。こうなると、技術の核心の所在は情報産業ということにもなりかねない。

個々の技術の情報化できる部分については、そういう方向に動くと考えて良さそうだが、その時、建築設計者やゼネコンの役割はもっと先鋭化しなければならぬだろう。いくつかの方向が考えられようが、私は編集者としての役割に期待をかけている。

編集の妙

個々の要素技術の核心が外部化し、更にはオープンソースとして情報化されると、それらを集めて建築全体にまとめ上げることの敷居は今より遥かに低くなるだろう。建物の利用者や発注者が相当程度のことをできる環境も格段に整うに違いない。ただ、数多ある要素技術のどれを選び、どれと組み合わせるのが、当該プロジェクトにとって一番面白く、効果があるかという点に関しては、能力と経験次第という面が十分に残り得る。編集の妙というものである。

また、情報化されるのは技術の核心のすべてではない。多くの場合、建築技術の核心部分は、物質と人間による工作とで構成される。その工作者としての人間に適切な能力発揮の場や修練の場を与え、健全に育て上げる行為も、ここでいう編集の重要な機能だろう。編集者はそうやって物書きを育て文化の厚みを形成してきた。売れっ子作家に原稿依頼して、時々彼らを消費するだけでは編集の醍醐味はない。

「マネジメント」ではほんやりしすぎる。「編集」という未来像の絞込み方があっても良い。